

# 琉球大学学術リポジトリ

小学生の授業における質問や発表をとおした意思表示に関する研究

(2) 一小3から小6の意思表示認知の特徴一

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2008-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平田, 幹夫, 知花, 優希, Hirata, Mikio, Chibana Yuuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/5688">http://hdl.handle.net/20.500.12000/5688</a>

## 小学生の授業における質問や発表をとおした 意思表示に関する研究 (Ⅱ)

—小3から小6の意思表示認知の特徴—

平田 幹夫\* 知花 優希\*\*

### A Study on Pupils' Self Expression in through their Active Participation in an Element Classroom (Ⅱ)

—Feature of the Recognition of Self Expression From Third to Sixth Grade—

HIRATA Mikio CHIBANA Yuuki

#### はじめに

文部科学省(2003)は、平成15年度予算において①個に応じた指導の充実②学習意欲や学力の質の向上③個性能力の伸長④英語力・国語力の増進からなる「学力向上アクションプラン」に取り組んでいる。個に応じた指導の充実の具体的な取り組みとして、小学校では算数を中心に習熟度別の少人数クラス編成による授業が行われている。このような取り組みをもっと効率よく効果的に行うためには、教師が授業の中で一人ひとりの子どもの学習の状況を連続的に評価し把握する必要がある。そのためには、一人ひとりの子どもが授業において質問や発表が自由にできなければならない。しかし、著者がこれまで見てきた授業のほとんどは、「できた人は手を挙げてください」「分かる人は手を挙げてください」という教師の言葉が多く使われる授業であった。そのような授業においては、決まった子どもたちが元気な声で挙手し、指名さ

れ発表している場面が展開されていた。そして、素晴らしい授業が展開されているかのように錯覚している教師の姿であった。

平田(2003)が指摘しているように、教師は、「わかっているけれども何となく恥ずかしくて、うまく答えられない子」「発表することや表現することが苦手な子」「答える意欲がなく答えられない子」「問題の意味が理解できなくて答えられない子」等に視点を当てた授業の工夫が十分になされていない。生田・丸野(2000)は、なぜ小学生が授業で質問しないかについて、授業中に質問をしない子どもたちは、質問行動についての価値を見出していないか、あるいは質問を思いつかないからであると述べている。

平田(1996a)は、子ども一人ひとりが生き生きとした授業運営を行うためには、子どもの意思表示を規定している要因を明らかにする必要があると捉え、中学生の授業における意思表示認知尺度を作成し、自己効力感認知、友人関係認知、コスト認知、利益認知、結果価値認知、

\* 琉球大学教育学部 \*\* 島尻教育研究所 適応指導教室

教師信頼度認知の6因子の存在を明らかにしている。平田(1996b)は、理科の授業において意思表示の手段として、挙手の代わりに簡易アナライザーを用いて質問や発表等の意思表示を行わせる授業実践を毎時間の理科の授業で行い、意思表示認知得点の上昇でもってその有効性を報告している。

平田・知花(2003)は、中学生版意思表示認知尺度(平田1996a)の内容を変えずに、小学生が答えやすいように若干の修正を加えた小学生版意思表示認知尺度を作成し実施した。その結果、平田(1996a)と同様に意思表示認知を規定している要因は6因子であることが認められた。そして、下記のことが明らかになった。

- ①「先生がいっしょうけんめい教えていたら、自分もがんばろうと思います。」等の教師信頼度認知については、女子の方が男子より得点が高く、女子の方が教師の影響を受けやすい。
- ②「発表して間違うと、自分は頭が悪いと思われるのでいいです。」などのコスト認知は、女子の方が男子より高く、コストの影響を受けやすい。
- ③「質問や発表をすることはいいことです。」などの結果価値認知については、女子の方が男子より高く、女子の方が男子より授業中の発表や質問について価値判断している。
- ④「わたしは、友だちとなかよくできる時は、楽しく発表や質問ができます。」などの友人関係認知については女子の方が男子より高く、男子に比べ女子は授業中の発表や質問をする時に友だちの影響を受ける。
- ⑤「質問したり発表したりすると、成績があがるような気がします。」などの利益認知については全体の性差は見出されなかった。
- ⑥「わたしは授業中、分かっているけど、手をあげて質問することができません。」等の自己効力感認知は男子の方が女子よりも高く、男子は女子よりも「自分は授業中に発表や質問などの意思表示ができる」と自己認知している。
- ⑦意思表示認知については、男女間で差はなかった。

①から⑥までの結果は、平田(1996a)が中

学1年生に対して行った調査結果と同様であった。しかし、⑦については「男子の方が意思表示認知が高い」とは異なるものであった。平田・知花(2003)は、3年生から6年生の各学年内の性差及び各学年間の差及び性差についての検討がなされていない。

そこで本研究では、小学校の授業における質問や発表をとおした意思表示認知において、3年生から6年生の各学年内において性差があるかどうかを検討することを目的とする。

## 方法

### 調査対象

本研究は県内の小学校3校における小学3年生165名、4年生281名、5年生300名、6年生307名計1053名を対象に『小学生の授業における「意思表示」に関するアンケート』を実施し、行った。そのうち、記入漏れや記入ミスがあったものを除くと3年生5クラス156名(男子81名、女子75名:有効回答率94.55%)、4年生9クラス276名(男子145名、女子131名:有効回答率98.22%)、5年生9クラス285名(男子132名、女子153名:有効回答率95.00%)、6年生9クラス298名(男子158名、女子140名:有効回答率97.07%)、計1015名(男子516名、女子499名:有効回答率96.39%)であった。

### 調査時期

2002年10月上旬から12月上旬に実施した。

### 調査手続き

筆者が本質問紙を協力校に持参し、内容や実施手順の説明を行った。アンケート実施においては、本調査が学校の成績に一切関係がないことを事前に説明してもらった後、担任が質問項目を読み上げ、児童がその答えを質問紙に書き込む形態を取った。

### 調査尺度

小学生の授業における質問や発表をとおした意思表示に関する調査を行うために、平田

(1996a) が『中学生の授業における「意思表示」に関する研究』で用いた授業における意思表示に関する関連6要因である自己効力感認知、友人関係認知、コスト認知、利益認知、結果価値認知、教師信頼度認知のそれぞれの質問項目について内容は変えず、小学生にわかりやすい言葉を用いて意思表示認知尺度(37項目からなる)を作成した。

なお、全ての項目は「まったくあてはまらない(1点)」、「少しあてはまる(2点)」、「よくあてはまる(3点)」、「とてもよくあてはまる(4点)」の4件法で回答させた。得点が高いほど授業における質問や発表などの意思表示認知が高いことを意味する。ただし、自己効力感認知の一部の項目とコスト認知の全ての項目については逆転項目として処理した。

## 結果

授業における意思表示認知について小学校3年生から6年生の各学年毎にその結果を述べる。

### 1. 3年生(表1)

3年生(N=156)における意思表示認知得点の平均は93.92で、標準偏差は19.130であった。また、男子(N=81)の平均値が96.21、標準偏差が20.286、女子(N=75)の平均値が91.44、標準偏差が17.597であった。そこで、意思表示認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は1.563で、男女間で有意な差は見られず、授業における意思表示に性差がないことが確認された。

教師信頼度認知尺度7項目の全体の合計得点の平均は21.88で、標準偏差は6.444であった。また、男子(N=81)の平均値が21.84、標準偏差が6.853、女子(N=75)の平均値が21.92、標準偏差が6.017であった。そこで、教師信頼度認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-.078で、男女間で有意な差は見られなかった。

コスト認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は18.15で、標準偏差は5.065であった。また、男子(N=81)の平均値が19.59、標準偏差が4.

690、女子(N=75)の平均値が16.60、標準偏差が5.024であった。そこで、コスト認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は3.848であった。男女間で有意な差( $p<.001$ )が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子よりコスト認知が高いことが認められた。

結果価値認知尺度5項目の全体の合計得点の平均は15.92で、標準偏差は4.469であった。また、男子(N=81)の平均値が15.88、標準偏差が4.910、女子(N=75)の平均値が15.97、標準偏差が3.969であった。そこで、結果価値認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-.135で、男女間で有意な差は見られなかった。

友人関係認知尺度4項目の全体の合計得点の平均は9.72で、標準偏差は3.565であった。また、男子(N=81)の平均値が9.79、標準偏差が3.741、女子(N=75)の平均値が9.64、標準偏差が3.388であった。そこで、友人関係認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は.262で、男女間で有意な差は見られなかった。

利益認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は17.43で、標準偏差は5.577であった。また、男子(N=81)の平均値が17.80、標準偏差が5.923、女子(N=75)の平均値が17.03、標準偏差が5.186であった。そこで、利益認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は.867で、男女間で有意な差は見られなかった。

自己効力感認知尺度4項目の全体の合計得点の平均は10.81で、標準偏差は2.900であった。また、男子(N=81)の平均値が11.31、標準偏差が2.853、女子(N=75)の平均値が10.28、標準偏差が2.874であった。そこで、自己効力感認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は2.242で、男女間で有意な差( $p<.05$ )が見られ、授業における意思表示において男子の方が女子より自己効力感認知が高いことが認められた。

表1 第3学年全体ならびに男女別の平均値, 標準偏差

各尺度	男子(N=81)		女子(N=75)		全体(N=156)		平均の性差 (t 値)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
教師信頼	21.84	6.853	21.92	6.017	21.88	6.444	-.078
コスト	19.59	4.690	16.60	5.024	18.15	5.065	3.848***
結果価値	15.88	4.910	15.97	3.969	15.92	4.469	-.135
友人関係	9.79	3.741	9.64	3.388	9.72	3.565	.262
利益	17.80	5.923	17.03	5.186	17.43	5.577	.867
自己効力感	11.31	2.853	10.28	2.874	10.81	2.900	2.242*
意思表示	96.21	20.286	91.44	17.597	93.92	19.130	1.563

\*p<.05, \*\*\*p<.001

## 2. 4年生 (表2)

4年生 (N=276) における意思表示認知得点の平均は91.08で、標準偏差は16.798であった。また、男子 (N=145) の平均値が89.43、標準偏差が17.886、女子 (N=131) の平均値が92.90、標準偏差が15.367であった。そこで、意思表示認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-1.721で、男女間で有意な差は見られず、授業における意思表示に性差がないことが確認された。

教師信頼度認知尺度7項目の全体の合計得点の平均は21.40で、標準偏差は5.744であった。また、男子 (N=145) の平均値が20.41、標準偏差が6.246、女子 (N=131) の平均値が22.50、標準偏差が4.928であった。そこで、教師信頼度認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-3.063で、男女間で有意な差 (p<.01) が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子より教師信頼度認知が高いことが認められた。

コスト認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は17.33で、標準偏差は4.535であった。また、男子 (N=145) の平均値が18.13、標準偏差が4.399、女子 (N=131) の平均値が16.44、標準偏差が4.534であった。そこで、コスト認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は3.138で、男女間で有意な差 (p<.01) が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子よりコスト認知が高いこと

が認められた。

結果価値認知尺度5項目の全体の合計得点の平均は16.40で、標準偏差は4.045であった。また、男子 (N=145) の平均値が15.97、標準偏差が4.296、女子 (N=131) の平均値が16.87、標準偏差が3.707であった。そこで、結果価値認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-1.849で、男女間で有意な差は見られなかった。

友人関係認知尺度4項目の全体の合計得点の平均は8.59で、標準偏差は3.171であった。また、男子 (N=145) の平均値が8.21、標準偏差が3.335、女子 (N=131) の平均値が9.01、標準偏差が2.934であった。そこで、友人関係認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-2.108で、男女間で有意な差 (p<.05) が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子より友人関係認知が高いことが認められた。

利益認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は16.59で、標準偏差は4.774であった。また、男子 (N=145) の平均値が15.74、標準偏差が5.008、女子 (N=131) の平均値が17.53、標準偏差が4.329であった。そこで、利益認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-3.146で、男女間で有意な差 (p<.01) が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子より利益認知が高いことが認められた。

表2 第4学年全体ならびに男女別の平均値, 標準偏差

各尺度	男子 (N=145)		女子 (N=131)		全体 (N=276)		平均の性差 (t 値)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
教師信頼	20.41	6.246	22.50	4.928	21.40	5.744	-3.063**
コスト	18.13	4.399	16.44	4.534	17.33	4.535	3.138**
結果価値	15.97	4.296	16.87	3.707	16.40	4.045	-1.849
友人関係	8.21	3.335	9.01	2.934	8.59	3.171	-2.108*
利益	15.74	5.008	17.53	4.329	16.59	4.774	-3.146**
自己効力感	10.97	2.556	10.56	2.447	10.77	2.508	1.352
意思表示	89.43	17.886	92.90	15.367	91.08	16.798	-1.721

\*p<.05, \*\*p<.01

自己効力感認知尺度4項目の全体の合計得点の平均は10.77で、標準偏差は2.508であった。また、男子(N=145)の平均値が10.97、標準偏差が2.556、女子(N=131)の平均値が10.56、標準偏差が2.447であった。そこで、自己効力感認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は1.352で、男女間で有意な差は見られなかった。

### 3. 5年生(表3)

5年生(N=285)における意思表示認知得点の平均は84.46で、標準偏差は17.298であった。また、男子(N=132)の平均値が85.89、標準偏差が17.745、女子(N=153)の平均値が83.23、標準偏差が16.865であった。そこで、意思表示認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は1.299で、男女間で有意な差は見られず、授業における意思表示に性差がないことが確認された。

教師信頼度認知尺度7項目の全体の合計得点の平均は18.80で、標準偏差は5.924であった。また、男子(N=132)の平均値が18.24、標準偏差が6.105、女子(N=153)の平均値が19.29、標準偏差が5.738であった。そこで、教師信頼度認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-1.488で、男女間で有意な差は見られなかった。

コスト認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は17.61で、標準偏差は4.571であった。また、

男子(N=132)の平均値が18.89、標準偏差が4.339、女子(N=153)の平均値が16.50、標準偏差が4.487であった。そこで、コスト認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は4.566で、男女間で有意な差(p<.001)が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子よりコスト認知が高いことが認められた。

結果価値認知尺度この5項目の全体の合計得点の平均は14.54で、標準偏差は3.987であった。また、男子(N=132)の平均値が14.40、標準偏差が4.053、女子(N=153)の平均値が14.65、標準偏差が3.939であった。そこで、結果価値認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-0.532で、男女間で有意な差は見られなかった。

友人関係認知尺度4項目の全体の合計得点の平均は8.27で、標準偏差は3.130であった。また、男子(N=132)の平均値が8.31、標準偏差が3.124、女子(N=153)の平均値が8.24、標準偏差が3.145であった。そこで、友人関係認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は.202で、男女間で有意な差は見られなかった。

利益認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は15.68で、標準偏差は4.766であった。また、男子(N=132)の平均値が15.83、標準偏差が5.211、女子(N=153)の平均値が15.56、標準偏差が4.359であった。そこで、利益認知の

表3 第5学年全体ならびに男女別の平均値, 標準偏差

各尺度	男子 (N=132)		女子 (N=153)		全体 (N=285)		平均の性差 (t 値)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
教師信頼	18.24	6.105	19.29	5.738	18.80	5.924	-1.488
コスト	18.89	4.339	16.50	4.487	17.61	4.571	4.566***
結果価値	14.40	4.053	14.65	3.939	14.54	3.987	-.532
友人関係	8.31	3.124	8.24	3.145	8.27	3.130	.202
利益	15.83	5.211	15.56	4.359	15.68	4.766	.477
自己効力感	10.22	2.688	9.00	2.497	9.57	2.654	3.698***
意思表示	85.89	17.745	83.23	16.865	84.46	17.298	1.299

\*\*\*p<.001

性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は.477で、男女間で有意な差は見られなかった。

自己効力感認知尺度4項目の全体の合計得点の平均は9.57で、標準偏差は2.654であった。また、男子(N=132)の平均値が10.22、標準偏差が2.688、女子(N=153)の平均値が9.00、標準偏差が2.497であった。そこで、自己効力感認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は3.698で、男女間で有意な差(p<.001)が見られ、授業における意思表示において男子の方が女子より自己効力感認知が高いことが認められた。

#### 4. 6年生(表4)

6年生(N=298)における意思表示認知得点の平均は80.40で、標準偏差は16.505であった。また、男子(N=158)の平均値が78.72、標準偏差が15.890、女子(N=140)の平均値が82.30、標準偏差が17.029であった。そこで、意思表示認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-1.879で、男女間で有意な差は見られず、授業における意思表示に性差がないことが確認された。

教師信頼度認知尺度7項目の全体の合計得点の平均は17.53で、標準偏差は5.632であった。また、男子(N=158)の平均値が16.78、標準偏差が5.346、女子(N=140)の平均値が18.38、標準偏差が5.843であった。そこで、教

師信頼度認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-2.459で、男女間で有意な差(p<.05)が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子より教師信頼度認知が高いことが認められた。

コスト認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は17.91で、標準偏差は4.121であった。また、男子(N=158)の平均値が18.37、標準偏差が4.243、女子(N=140)の平均値が17.39、標準偏差が3.929であった。そこで、コスト認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は2.061で、男女間で有意な差(p<.05)が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子よりコスト認知が高いことが認められた。

結果価値認知尺度5項目の全体の合計得点の平均は13.24で、標準偏差は4.061であった。また、男子(N=158)の平均値が12.85、標準偏差が4.062、女子(N=140)の平均値が13.68、標準偏差が4.029であった。そこで、結果価値認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-1.768で、男女間で有意な差は見られなかった。

友人関係認知尺度4項目の全体の合計得点の平均は7.84で、標準偏差は2.910であった。また、男子(N=158)の平均値が7.29、標準偏差が2.710、女子(N=140)の平均値が8.46、標準偏差が3.012であった。そこで、友人関係認知の性差を見るために対応のないt検定を行っ

表4 第6学年全体ならびに男女別の平均値, 標準偏差

各尺度	男子 (N=158)		女子 (N=140)		全体 (N=298)		平均の性差 (t 値)
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
教師信頼	16.78	5.346	18.38	5.843	17.53	5.632	-2.459*
コスト	18.37	4.243	17.39	3.929	17.91	4.121	2.061*
結果価値	12.85	4.062	13.68	4.029	13.24	4.061	-1.768
友人関係	7.29	2.710	8.46	3.012	7.84	2.910	-3.518**
利益	14.53	4.331	15.13	4.561	14.81	4.443	-1.158
自己効力感	8.89	2.973	9.26	2.535	9.06	2.778	-1.774
意思表示	78.72	15.890	82.30	17.029	80.40	16.505	-1.879

\*p<.05,\*\*p<.01

表5 「意思表示」関連要因における学年内男女差

各尺度	学年			
	3年	4年	5年	6年
教師信頼度	-	男子<女子	-	男子<女子
コスト	男子<女子	男子<女子	男子<女子	男子<女子
結果価値	-	-	-	-
友人関係	-	男子<女子	-	男子<女子
利益	-	男子<女子	-	-
自己効力感	男子>女子	-	男子>女子	-
意思表示	-	-	-	-

た結果、t 値は-3.518で、男女間で有意な差 (p<.01) が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子より友人関係認知が高いことが認められた。

利益認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は14.81で、標準偏差は4.443であった。また、男子 (N=158) の平均値が14.53、標準偏差が4.331、女子 (N=140) の平均値が15.13、標準偏差が4.561であった。そこで、利益認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t 値は-1.158で、男女間で有意な差は見られなかった。

自己効力感認知尺度6項目の全体の合計得点の平均は9.06で、標準偏差は2.778であった。また、男子 (N=158) の平均値が8.89、標準偏差が2.973、女子 (N=140) の平均値が9.26、標準偏差が2.535であった。そこで、自己効力感認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t 値は-1.774で、男女間で有意

な差は見られなかった。

## 考 察

本研究の目的は、小学校の授業における質問や発表をととした意思表示認知及び関連要因において3年生から6年生の各学年において性差があるかどうかを検討することであった。その結果をまとめたのが、表5である。

授業における質問や発表をととした意思表示認知と下位尺度の一つである結果価値については、3年生から6年生まで性差はないことが示唆された。3年生は、教師信頼度認知と結果価値認知、友人関係認知、利益認知においても性差はなかった。しかし、コスト認知は女子の方が高く、自己効力感認知は男子の方が高いことが示された。4年生は、自己効力感認知と結果価値認知において男女間で性差はなかった。しかし、教師信頼度認知、コスト認知、友人関

係認知、利益認知のいずれも男子より女子の方が高かった。5年生は、教師信頼度認知、友人関係認知、利益認知において性差がなかった。しかし、コスト認知は女子の方が高く、自己効力感認知は男子の方が高かった。6年生は、利益認知、自己効力感認知において性差はなかった。しかし、教師信頼度認知とコスト認知、友人関係認知に性差があり、いずれも女子の方が高いことが示された。

結果価値認知について学年別にみると、どの学年においても性差は見られなかった。つまり、授業中の質問や発表について、男女共に価値を見出していることが明らかになった。

人間関係に関する質問項目からなる教師信頼度認知と友人関係認知については、4年生と6年生で女子の方が男子より高くなっている。この結果については、4年生と6年生の学年の発達段階における特徴なのかどうかについては、今後の課題である。コスト認知については、3年生から6年生のすべての学年において、性差があり女子が高いことが示された。この結果は、女子の方が男子に比べて他者の評価を意識した不安傾向が強いと考えられる。筆者がこれまで関わってきた小学校で日頃感じている臨床的知見と一致する。

本研究において、意思表示認知及びその下位尺度の学年内の性差について検討したが、学年間の差について言及しなかった。そのため考察が十分なされたとはいえない。学年間の差を含めた総合的な考察は、「小学生の授業における質問や発表をとおした意思表示に関する研究(Ⅲ)」において報告する予定である。

おわりに

意思表示認知尺度得点を高めるような授業実践の工夫を行えば、子ども一人ひとりにとって「わかる、できる」と言える授業、「わからない、できない、質問があります」と言えるような「楽しい」授業が構築されると考える(平田、知花2003)。

子どもたちが、授業において自由に質問や発

表ができるようにするためには、学年の発達段階における特徴を把握した上で授業運営の工夫をする必要がある。子ども一人ひとりが輝いている授業は、一人ひとりの子どもが自由に発表や質問ができる授業に裏打ちされた「分かる、できる、楽しい」授業である。そのような授業は、教師が子どもと共に授業を楽しんでいる姿の中から造りあげていくものではないだろうか。

## 引用文献

- ・文部科学省 2003 文部科学時報 No.1523 4月号 ぎょうせい
- ・平田幹夫 1996a 入学直後の中学生の授業における「意思表示」に関する研究 琉球大学教育学部紀要、50、333-346
- ・生田淳一・丸野俊一 2000 なぜ小学生が授業中に質問をしないのか? 日本教育心理学会第 42回総会発表論文集、390
- ・平田幹夫・知花優希 2003 小学生の授業における質問や発表をとおした意思表示に関する研究(I) -意思表示認知尺度の作成- 琉球大学教育学部紀要、63、347-356
- ・桜井茂男 1997 学習意欲の心理学-自ら学ぶ子どもを育てる 誠信書房
- ・宮本美沙子 1992 やる気の心理学 創元社
- ・徳島泰彦 2002 『授業中、すぐに「わかりません」「できません」と言う子にどう対応するか』 児童心理 10月号 特集『すぐ「できない」という子』 金子書房
- ・平田幹夫 1996b 中学生が自由に意思表示できる授業づくり-理科授業における簡易アナライザーの有効性- 琉球大学教育学部紀要附属教育実践センター紀要、4、75-90

## 【謝辞】

本研究の調査に快く御協力いただきました、東風平小学校、佐敷小学校、大道小学校の職員及び児童の皆さんに深く感謝いたします。